

TV 報道検証【報道特集】 報告書

テレビ局： TBS	番組名：報道特集	放送日： 2018年8月25日
出演者：金平茂紀、日下部正樹、膳場貴子、日比麻音子 ゲスト：湯本和寛(SBC 信越放送、・記者)		
検証テーマ： 米朝関係、オープニング、国と関西電力が防災訓練、両陛下思い出のテニスコートへ 眞子さまが手話スピーチコンテストに出席、東京医科大学 【特集】 消えた村のしんぶん		
報道トピック一覧 <ul style="list-style-type: none"> ・ 米朝関係 ・ アジア大会で男子マラソン井上、32年ぶりに日本勢が金メダル ・ 東京パラリンピック、開幕まであと二年 ・ 国と関西電力が防災訓練 ・ 観光列車「伊予灘ものがたり」再開 ・ 広島・JR 芸備線不通区間の一部再開 ・ フィリピンで日本人女性が射殺される ・ 岩手県、80歳女性殺害容疑で74歳男性を逮捕 ・ 過酸化アセドを自宅で製造したとして逮捕された大学生が3Dプリンターで拳銃を製造していた疑い ・ 長崎県刑男性係止があおり運転で書類送検 ・ 石川県、オリジナルブランドの梨“加賀しずく”が初競り ・ 両陛下思い出のテニスコートへ ・ 眞子さまが手話スピーチコンテストに出席 ・ 「美人局」グループリーダー格逮捕 ・ 東京医科大学 ・ 【特集】 ダブル台風なぜ相次ぐ異常気象 ・ 【特集】 消えた村のしんぶん ・ スポーツ報道 		
放送法第4条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨 <ul style="list-style-type: none"> ・ 米朝関係：結論→特に問題なし トランプ氏がツイッターを通じて現時点で朝鮮半島の非核化に十分な進展が見られないとして北朝鮮の非核化が停滞していることに不満を顕にしたこと、貿易問題で我々が強固な姿勢をとっているので中国は以前のように非核化プロセスに協力していないと中国を批判した上でポンペオ氏の訪朝は中国との貿易問題が解決したあとになるという見方を示したこと、一方で金正恩党委員長に対してもっとも温かい敬意を払いたい、近く逢えるのを楽しみにしている、として二回目の首脳会談の開催に改めて意欲示したとのが伝えられた。このトピックに当てられた時間は150秒で、放送法の観点からは特に問題は見られなかった。 ・ オープニング：結論→特に問題なし 金平キャスターが「ええ、8月になると戦争というテーマがメディアに多く登場しますが、なぜ私達があのようなまちがい、過ちを犯してしまったのかというアプローチ、今という時代だからこそ大切です。自分たちのふ 		

るさとの新聞が国家の監視によってなくなってしまった歴史、今日の特集でお伝えします。」と番組のオープニングで述べていた。このコメントのシーンは 17 秒で放送法の観点からは特に問題は見られなかった。

・国と関西電力が防災訓練：結論→特に問題なし

国と関西電力は地震により福井県の大飯原発と高浜原発で同時に事故が起きたことを想定したはじめての大規模な防災訓練を行ったこと、複数の原発の同時事故を想定した国による訓練は初めてで今日と明日の 2 日間で周辺自治体や警察、自衛隊など 191 の機関からおよそ 2 万 1600 人が参加する予定であることが伝えられた。このトピックに当てられた時間は 60 秒で、放送法の観点からは特に問題は見られなかった。

・両陛下思い出のテニスコートへ：結論→特に問題なし

軽井沢で静養中の天皇后両陛下が思い出のテニスコートを訪ねられたこと、軽井沢会テニスコートは 61 年前の夏に両陛下が出会い恋が生まれた場所として知られていること、両陛下は 30 分ほど滞在しベンチに座って試合の様子を見学したりにこやかにプレイヤーと言葉を交わしたりされていたこと、陛下は帰り際皇后様と共に来られてよかったねと話されたということが伝えられた。このトピックに当てられた時間は 33 秒で放送法第四条の観点からは特に問題は見られなかった。

・眞子さまが手話スピーチコンテストに出席：結論→特に問題なし

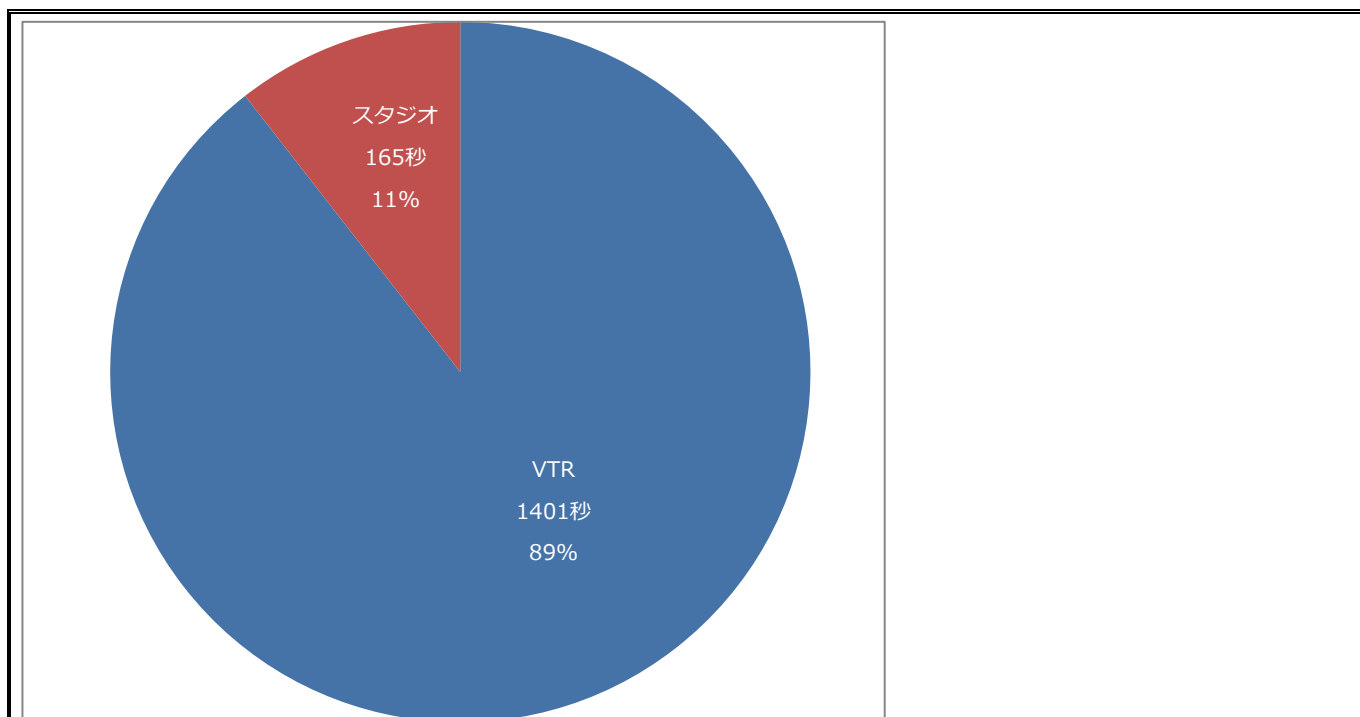
眞子さまが今日午後東京千代田区で行われた全国高校生手話によるスピーチコンテストに出席しおよそ五分半に渡って手話を交えて挨拶されたこと、眞子さまにとってこのコンテストへの出席は今年で三年連続となること、眞子さまは全国から参加した高校生による熱のこもった手話スピーチを見守り拍手を送られていたとことが伝えられた。このトピックに当てられた時間は 59 秒で、放送法第四条の観点からは特に問題は見られなかった。

・東京医科大学：結論→特に問題なし

東京医科大学の不正入試問題を受け被害対策弁護団が電話で法律相談を受け付ける緊急ホットラインを開設したこと、今日は 55 件の電話があったほかこれまでにメールで 20 件以上の相談が寄せられているということが報じられたほか、東京医大の入試では女性や浪人生の得点を一律に減らすなどの不正が明らかになったという事実が改めて伝えられるとともに、医学部入試における女性差別対策弁護団の山崎新弁護士が「親御さんからしてみればですね、自分の娘がですね入試を受けて公正に判断されると思って一生懸命支援して来て応援してきたのにこんな事になってというお怒りの気持ちが凄く聞かれます。」とコメントするシーンが取り上げられていた。このトピックに当てられた時間は 55 秒で放送法の観点からは特に問題は見られなかった。

・【特集】消えた村のしんぶん：結論→特に問題なし

前場キャスターによって「長野県内で村の青年団が戦前から発行してきた新聞、時報自由な言論活動をしてきましたが、戦争とともに発禁、休刊が相次ぐ事態になります。特高警察の貴重な資料から戦時中の言論弾圧の実態に迫ります。」と特集のテーマが紹介され VTR が取り上げられた。この特集は大きく VTR とスタジオという 2 つの場面に分けられ、それぞれの場面の時間配分は以下の通りであった。



VTR では滋野時報の創刊は大正デモクラシー影響が色濃く残る昭和 2 年（1927 年）に青年団によって創刊された滋野時報が、製糸業や養蚕業などの輸出で潤った村の財政を背景にしていたことや、全国的には村長など有力者が団長を務めるのが一般的だったのに対して長野県では団員の中から代表を選ぶ自主化運動が展開されていたことが説明されたほか、特別高等警察は滋野時報に対し警戒をし発禁や拘束などを行ったことなどが伝えられ、特別高等警察の動きとや時代の変遷の中での滋野時報について取り上げられていた。

創刊号からは「今や滋野は明け放たれんとしている暁だ」や「よろしむべし、知らしむべからずという言葉は過去だ遺物だ。」「我ら昭和の民はよろしく村政に携わって今迄為政者の為の為政の感の有った政治を捨てて、絶対的の村民のための為政であらしむべく村当局、否大きくは国政までも注視すべきだ」という記事の一部が取り上げられた。

その後時代の変遷とともに記事の論調も変化していく様子が取り上げられ、「吾が青木時報が養蚕農民はどこへ行くの記事にて発禁され、和時報はメイデーの記事にて発禁を食ひ、神科時報も本年になって二回発禁となった矢先、またまた滋野時報も 誤謬の衣を捨てよの記事が先鋭的であるを理由で戒告請書を上田署にとられた。」という昭和 4 年（1929 年）の記事や、昭和 7 年（1932 年）の「時報を先鋭化とか赤いとかの名において押収するのはあまりの重圧である。」「官憲当局者よ君たちが先鋭化とか赤いとかを論ずる前に農民をして尖鋭化させるような原因を考慮せよ。」「満州の産業が反映したとしてとてブルジョワジー以外の民衆に 何の利益があろうぞ。幸福があろうぞ。」「人類幸福の為め、一斉志那より手を引け」といった記事を最後に発行や配布の禁止が相次いだことが伝えられた。

その後に発行された現物が残っている昭和 14 年（1939 年）の記事では「人生最大最後のご奉公ををなせし英霊に敬虔の意を表はし、又身を以て国難の大防楯となり、ついに名誉とは申せ傷疾せられし軍人に敬意を致すを忘るべからざる」、「栄ゆく御世に生を受けたることの有難さをつくづく思はせられ御国のためにできるだけ務めたい、働きたいといふ心持でいっぱいである。」と論調が一変したことが VTR で示されていた。その後昭和 13 年に国は全国で新聞の統廃合に着手し長野県内でも滋野時報を含む 350 紙以上もの新聞が対象となり一県一紙の方針のもと廃刊が相次いだことや、その理由として特高警察は言論統制やパルプ資源の節約を強調したこと、「自発的廃刊を慫慂す」としたことが伝えられ、新聞の統廃合が命令された 2 年後の昭和 15 年には滋野時報は廃刊

となり廃刊号の編集後記には「部長は心痛の余り？不幸病を得て数日来病床に呻吟する身となり、編集の任に堪えず、…」と無念の思いが記された記事が取り上げられていた。

その後、昭和 20 年の敗戦から 2 年後に「志げ乃むら」の名前でよみがえった滋野時報が言論弾圧に屈した反省を込めながら「信ずべからざるものを信じ、聞くべからずものに盲従した哀れな奴隷的無知性を一擲して真に自主的な歩程を発足するに足る高き理想と信念の堅持を新にする希望の新春である。」「若人よ立ち上がろう。光を慕う真夏の虫の如く。吾々も文化の栄光を求めて」と巻頭で謳っていた記事が紹介され VTR を締めくくった。

また、VTR をうけてスタジオでは以下に朱記したやり取りが繰り返されていた。

膳場「スタジオには取材をした SBC 信越放送の湯本記者に来てもらいました。湯本さん村の新聞、時報ですけれども戦前の自由な言論あの力強さ本当に印象的でした。」

湯本記者「小さな村の新聞が国策に対して激しい批判を展開していたというのが非常に驚きでした。二十歳前後の若者たちが世の中を少しでもよくしようとそのためには知識を得て、互いに意見を交わし目のまへの課題を解決して行かなければいけない。と考えていたことがですね時報の紙面を通して伝わってきました。民主主義社会でメディアがどうあるべきかということに関しても非常に学ぶべきところがありました。」

日下部「特高警察で出てきましたけれども、非常に我々は強権的なイメージを持つわけですがけれども、実際の取り締まりはどうだったんでしょうか？」

湯本記者「必ずしも強権的な手法を取ったわけではありませんでした。昭和 13 年から始まった新聞の統廃合も当初はそれを命じる法律がなかったため、世の中の状況を説いて付度させて自発的に求めるという手法を取ったわけですね。さらに一般紙の記者に対してもですね転職先をあっせんするというようなこともやってまして硬軟織り交ぜた手法を取っておりました。また取り締まられた側なんですけれども、戦争が始まって家族を亡くしていくというところですね国策に異議を唱えることがなくなっていったような状況もありました。子供の作文も強烈でしたけれども取り締まる側、取り締まられる側双方がですね、少しずつ戦時体制に突き進んでいった様子が見うけられました。

金平「特高警察の資料とか、古い新聞の現物がね歴史の資料が残っていることのかに大事なのかってことがここで痛感させられましたですけどもね。」

湯本記者「そうですね。実は特高警察の関係者何人かが後世への貴重な記録になるだろうということで資料を残していたんですね。特高警察の中にもそうした見識を持った人がいたということです。今年は公文書の隠蔽とか改ざんが問題となってますけれども、なにか後世に記録を残すということの大切さを痛感させられました。」

この特集について特に放送法第四条の観点からは問題となる場面は見られなかった。

最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨

特になし

検証者所感

・オープニング

金平氏自身がまさにメディアの内部の人間として 8 月になると好き好んで「戦争」というテーマを取り上げていながら「8 月になると戦争というテーマがメディアに多く登場します」とあたかも他人事かのようにコメントする一方で「私達が犯した間違いや過ち」と四半世紀も前の人たちを「彼ら」ではなく「私達」と自然に言ってしまう金平キャスターの感性に驚いた。

・【特集】 消えた村のしんぶん

年号を主に昭和で語っていた点が印象的であったが、1927年から1947年間の滋野時報にフォーカスを当てた特集であったが、主に時代の動きや特別高等警察の警戒との間で論調の変化が伝えられた。ただ、滋野時報は青年団が担っていた時報であることから執筆陣や青年団の構成員も新陳代謝があったはずで、そういった点はどうだったのだろうかということが気になった。